

新刊  
紹介

For some in ancient books delight;  
Others prefer what moderns write:  
Now I should be extremely loth  
Not to be thought expert in both.

大塚節治著

『回顧七十七年』

同朋舎、B 6 判  
六五〇頁、六、〇〇〇円

大塚先生は総長を退かれてから、日記や古い記録を整理して、自伝を記述しておられた。その間、『キリスト教要義』（日本キリスト教団出版局七一年刊）の執筆のため自伝のお仕事がのびのびになっていたようであった。たしか、一九七五年の年頭であったと思う。先生のお宅にお伺いしたところ、自伝の原稿に話が及び、「書き綴った原稿は

何かの参考になれば資料として用いて下さればありがたいと思っている」という意向を洩らされた。原稿を拝見すると、二〇〇字詰の原稿用紙に二、一七五枚あった。題名もすでに「回顧七十七年」と墨書してあった。ただ残念なことに、原稿は一九五三年昭和二八年で終わっていた。大塚先生が総長をひかれたのが一九六三年であったので、できればそのときまでの記録を含めたいと思つた。

しかし、なにぶん先生もお年を召され、筆をすすめるにはかなりのためらいがあった。そこで総長、理事長、両学長、校友会、同窓会の関係者に相談をし、刊行会をつくって出版を実現することになった。

はじめは、五〇〇頁の予定であったが、大塚先生の字はみみずのように連続した文字で、予想以上の分量となり、八ポの活字で二段組にして全部で六五〇頁からなる大著となった。写真もはじめは約八頁のものであったが、貴重な写真も多いので二四頁（三六枚）を収録するようになった。このように分量が三割も増えたにもかかわらず、定価は当初の通りにおさえることができた

のは、出版に尽力された同朋舎の協力によるものと深く感謝している。刊行の企てが伝えられると、内外の校友・同窓・教職員など、三〇四人の方々から二六三万円ほどの献金がなされ、本年六月首尾よく刊行の運びとなったことは感謝の至りである。

本年には同志社の三先輩の伝記が出版された。湯浅八郎先生の「あるりベラリストの回想」（MCA出版部）、安田忠吉先生の「ひとすじの生涯」（安田忠吉教師伝刊行会）それらに大塚先生の「回顧七十七年」である。

湯浅先生のは、オラール・ヒストリーという手法で先生にお話をきいてとったテープからおこしたもので、「回想録」というより「回想草話」といった性格が強い。安田先生のは、先生の記録を中心に鈴木義徳牧師がまとめられたものである。大塚先生の場合、ご自身の筆による回顧録であり、しかもその大部分は、日記から執筆されているので、きわめて地味な記述であるが、資料的にみると貴重な記録となっている。とくに戦前、戦中、そして戦争直後の混乱期の同志社の様子が内側から刻明にえがかれている。昭和の記録が本書の八十パーセント

を占めているのも注目すべきことであろう。

今日同志社があるということは、これらの先人たちの並々ならぬ労苦の積み重ねによるものであるとあらためて思わされた。

去る六月二五日にアーモスト館で催された出版記念会で、大塚先生は「毎日、エイッと気合いをかけて床を蹴って起きるようにしている」といって感謝のあいさつをされた。

同志社人の美しい友情と師弟の交わりが本書には記されている。わたしちもそれを味わい生かしてゆきたいものである。

(竹中正夫・大学神学部教授)

同志社大学アメリカ研究所編

## 『あるリベラリストの回想』

——湯浅八郎の日本とアメリカ——

(日本YMCA同盟出版部、B6判  
二三二頁、一、四〇〇円)

同志社大学アメリカ研究所が、湯浅八郎氏にまなこを向け、その生涯についてゆっくりと時間をかけて語ってもらおうよう懇請

し、テープをとったのは、三つの理由が重なったからだと思う。

第一は、湯浅八郎氏が、国際キリスト教大学総長の地位を去ったのちも、そして八十歳を越え、清子夫人に先立たれたのちもいっこうに衰えをみせず、ヒューマニスト的な社会活動をつづけているという点、第二は、湯浅氏とアメリカとのつながりの深さ、日本人として日米間の相互理解に寄与したその歴史的な意義、第三は、一九三〇年代に同志社総長として悪戦苦闘し、敗戦後息を吹きかえした同志社にもう一度総長として復帰したが、二度とも任期を全うしなかったことへの疑問である。

湯浅氏は一方的に語っただけではなく、アメリカ研究所のメンバーの問いにも答えた。テープが起こされて『あるリベラリストの回想』という題の一冊の本ができたが、湯浅氏をリベラリストとして規定することに異議はないとして、ではどういうタイプのリベラリストだったのだろうかとか考えながら読みはじめると、幼いころ、ウソをついたために母親に縁側からけ落とされ、薪丸太でたたか打ちのめされたとい

う話に出くわす。

明治初期の著名なクリスチャンは、ほとんど武家・士族の出身であり、湯浅八郎氏の父君治郎は例外的に町人であり、八郎氏のサムライ的な硬さは、母親初子の教育によるものであったかもしれないと思つた。同志社普通学校で学んでいるうちに、アメリカにたいしてはく然と親しみを感じたらしく、卒業と同時に太平洋をわたってアメリカに住みついてしまう。日本に帰る気は全くなかったのだけれども、結婚した相手の清子さんが帰りましようというのでしかたなしに帰ってくる。そのへんが私にはおもしろかった。

天皇だとか王様だとかの威圧を感じることもなしに、アメリカで気楽な研究生活を送っていた湯浅氏は、京都帝国大学教授としてもなおアメリカのリベラリストとして農学部学生を指導することができたが、同志社の総長に就任して学問の自由、信教の自由をまもろうとすると、軍人と右翼の側からの猛烈な反撃をうけた。行政の経験にとぼしく、社会科学にうとく、非常時日本の流れにうまく処することのできなかったこ

のアメリカ的自由人は敗退して、戦争中、妻子を京都に残してアメリカで生活することになる。試行錯誤のくりかえしとはいっても、その間ほかの人のできないことをやりとげた。そして七十二歳になって国際キリスト教大学を去ってから、人間としての値打ちがますます出てきて、いっそうの光をはなちはじめたのであるから、これは驚異というほかはない。

(和田 洋一・大学文学部名誉教授)

地学団体研究会京都支部

## 『京都五億年の旅』

法律文化社、B6判  
二〇六頁、九八〇円

この夏は有珠山の噴火、ニュージールランド沖の怪獣、世界的な異常気象など、自然現象に話題が集まりました。そのように特別なことが起こらなくても、日常の身近な自然がどのようにして形成され、その仕組みがどうなっているのかなど、興味を引かれるものです。本書でも講義で京都や琵琶

湖の自然史がテーマとして取り上げられています。「京都五億年の旅」は、そうした身近な自然の生い立ちを、わかりやすく語ってくれます。とかく地球の歴史に関する書物には専門的な化石や地質時代の名称、なじみの少ない外国の地名などが多く、気軽に読めるものが少なかったと思います。またそのような本の多くは、理論が強調されているわりに、データの解説が不親切で、読者自身が自然を観察して、理論を実感することを困難にしています。その点、本書は地学の専門外の人々を対象として新聞に掲載されたものが単行本にまとめられたもので、取り上げてある土地が身近なこと、化石、岩石、鉱物などに適宜スケッチや写真が添えられていること、自然の歴史を復元するためのデータが現地の観察やイラストマップまで付けて、豊富に取り入れられていることなど、全体として読みやすい構成になっています。それと言うのも、その内容が専門の研究者ばかりでなく、学校の先生や広く地学に興味を持つ人々の団体研究により地道に集積されたデータに基づいているからです。

五億年の旅は、丹波の小盆地周山で見つかった正珪(せいけい)岩のルーツさがしに始まり、北の丹後半島から南山城まで、京都府下全域について語られています。丹波山地が海底であった時代、るり深で火山が噴火した時代、地下のマグマの活動で奇岩怪石や美しい鉱物が大字山や笠置山に残されたこと、丹後半島の礫層から日本海の誕生が推論されることなどが時代を追って述べられています。京都盆地や福知山盆地の出現はずっと時代を下ってからで、その形成には東山や西山を作った地殻変動とともに、氷期の繰り返しに伴う海面の昇降も関連するようです。京都盆地北縁の深泥池に咲くミツガシワは池底の泥に含まれる花粉を調べることにより、一万年以上昔の氷河時代のわずれ形見であることが明らかにされています。地震、水害といった自然災害についても、京都を襲った奥丹後地震や南山城水害をとり上げ、昨今の無秩序な開発が自然災害の危険性をさらに大きくしていることを警告しています。

秋は野外に出かける良い季節です。出か

(次頁へ)